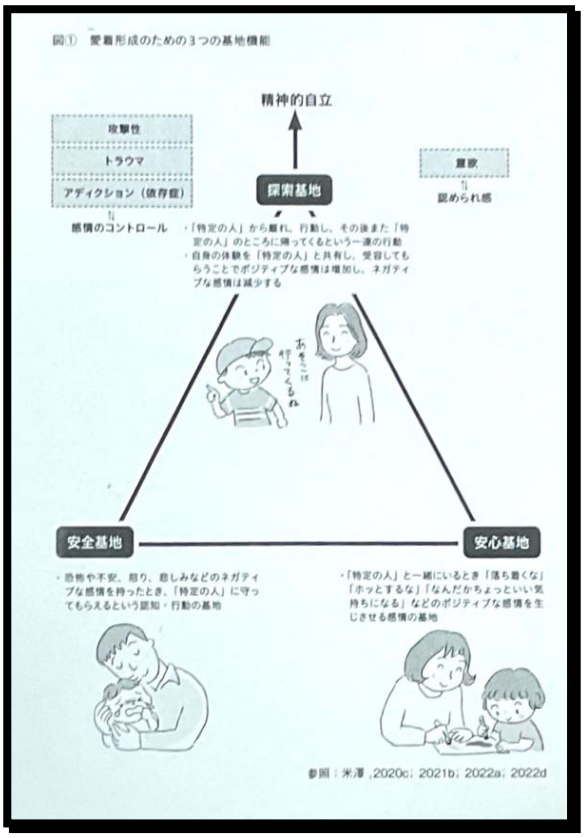
特別支援教育だより　　第３６号　発行：上伊那圏域特別支援教育連携協議会

○○上伊那
（まる　まる）

令和５年３月１４日

子ども達にとって安心・安全の基地に



１月 28 日に上伊那特別支援教育研究会第３回研修会において、和歌山大学の米澤好史先生から愛着障がいに関わるご講演をしていただきました。その中で特に印象に残ったことは、愛着の形成に向けて「安全」「安心」「探索」の三つの基地とその連携が大切であるというお話しです。助けてくれる特定の人がいる「安全の基地」。ホッとできる特定の人がいる「安心の基地」。自立に向けて歩み出す「探索の基地」。私たちが「探索」の基地の役割を担うには経験や組織の連携等が必要かもしれませんが、「安全」「安心」の基地には、人への心遣いや気づきといったことを大切にすれば誰もがその基地の特定の人となれるように思いました。

伊那養護学校での先生方の子ども達との生活の様子を見ていると、とても温かい気持ちになることが多くあります。膝を曲げて子どもの目線になり笑顔で話す先生、子ども達が「自分でわかったか、自分でできたか、自分からやろうとしていたか」を振り返り自分の支援を改善する先生、子どもの様々な表出を肯定的に受け入れて子どもと一緒に考える先生。そして、そのような子どもとの関わり方から、子ども達が先生のところに、「見て見て！」と駆け寄ってきたり、「昨日お母さんとケンカした・・」と相談にきたりしている様子。先生方が子ども達の「安全」「安心」の基地になっているのだと感じます。

私達は、子ども達のより豊かな生活に向け、特別支援教育に関わる様々な専門性を日々学んでいます。障がいに関わる理論や様々な支援の方法などの「やり方」を学ぶこともちろん大切ですが、私達自身の「在り方」(子どもにとっての「安全」「安心」の基地であるか)を見つめ返す事も大切だと思います。先日、先生方とお話をする中で「ICT や支援方法についての研修は参加者も分かりやすくて、すぐに実践に活かすことができる主体的な研修になるのだけれど、教師の在り方を主体的に考える研修はどうすればいいのかな・・・」という話題になりました。すると、ある先生が「結局のところ毎日の中で、『ありがとう』『お疲れ様』『嬉しいよ』とお互いに伝え合うことが大切ではないでしょうか」とお話をしてくださり、みんなで頷きました。そして、「・・・そう言えば最近行事で忙しくて、『ありがとう』『お疲れ様』『嬉しいよ』と生徒に伝えてないです」と顔を赤くしてお話してくださった先生にも、みんな笑顔で大きく頷きました。

ホッとできました😊

かみとくれん会長　　原　潤（伊那養護学校）

～現在、上伊那自立支援協議会では、それぞれの市町村の子ども達が、生後からステージの移行期の支援に、漏れや手薄さがないかを確認するため「Q-saccs」という地域分析の手法により、洗い出しをはかっています。乳児から園　園から小学校　小学校から中学校への移行では手厚い支援があります。一方で、中学校から高等学校　高等学校での支援　高等学校から就労　就労後の困り感　それぞれでの支援状況はまだ不十分であることが分かってきました。そこで、かみとくれん中学校・高等学校特別支援教育連絡会（研修会）で発表された飯島町のひきこもり防止に関する支援事業について紹介します。

中学校・高等学校と地域の連携

～飯島町つなぐ会の取り組みから～

飯島町では、丁寧に子どもの育ちの様子を見続け、保健師さんが小学校に訪問する、中学生は、教育委員会の放課後学習に参加する等の体制をとっている。その中での「つなぐ会」の取組の一つを下記に紹介したい。

中学校在学までの支援

○支援を丁寧に　・本人や保護者に自己理解を促すため。
　・ヘルプを適切な段階で出す必要性を理解するため。
　・先輩の話しを聞き、ロールモデルを作るため。

○外部機関に繋ぐ　・特に医療機関は早めに繋ぐ。
　・必要に応じて福祉に繋ぐ。
　・教育委員会や児童相談所などそれぞれに力になってくれそうな機関に繋ぐ。

○高校合格をゴールにしない　・「卒業できるか」に視点を置いて進路指導を

高等学校にお願いしていること（町の指導主事が各高校に訪問）

○「あれっ」と思ったら早めにアプローチ・・・本人、保護者、中学校、教育委員会、健康福祉課

○市町村に繋いでほしい状況・・・不登校、精神疾患、家庭状況、経済的な変化、引きこもり予防

飯島町の社会福祉協議会の活動

○子どもの学習支援事業・・・・支援の必要な子どもと学習支援サポーターを繋ぐ。

○ひきこもり支援推進事業（本人、保護者対象）・・・定例相談会月１回、居場所月１回など。

飯島町　つなぐ会一同　　飯島町　健康福祉課　保健福祉総合調整幹　中村杏子
飯島町教育委員会こども室　家庭相談員　　堀内澄江

上伊那の中で、多様な学びの場の一つとしてある日本語教室。現在、設置されている学校とそうでない学校があるのが実際です。どの学校にも日本語指導が必要な児童生徒がおり、困っている現状の中で、設置に向けて今後の方向性を探るため、まずは、課題の共有と、要望をまとめました。

日 本 語 指 導 に携わる先生方の困り感

〇小学校での困り感

・兼務校があるため、前日、週を通して支援できない。
・外国籍児童生徒指導用書と教材が足りていない。
・同時間に他学年児童が参加する。学習（時間割）のあり方を考え中。
・原学級へ戻っていくときのステップ、判断の在り方について。
・通級児童が多く、学習内容も多岐にわたるため、算数の授業が継続的に行えない。
・限られた時間で日本語を教えることと、教科の学習を教えてること。
・異学年、異教かを同時に指導すること。
・日本語教室がない。

〇中学校での困り感

・日本語教室に通っているせいとの授業内容は適切か。
・補充型の支援として、日本語教室での支援は役立っているか。
・進路指導の時に、どのように対応したらよいか。
・日本語教室に通う生徒の人数が増えてしまった場合、どのように対応していったらよいか。
・ずっと同じ職員が対応していないので、支援に差が生まれてしまうこと。

〇学校や市町村に要望したいこと

・日本語指導や児童支援に対し、さらに関心を持ってほしい。
・やさしい日本語での家庭学習の手引きがあればいい。
・市から配布される物については、各国の翻訳プリントを用意していただきたい。
・日本語指導教員を 1 名加配していただきたい。
・日本語指導教員には、特別なスキルが必要だと思われるので、専門家を増やしたい。
・ポルトガル語以外の言語の翻訳や通訳。例えば、最近増えてきてるベトナム語など。
・日本語指導の児童生徒が学校に転入学してきた場合には、できるだけすぐに支援体制を組むことが必要だと思われるが、そのためのノウハウがない学校ではすぐ支援体制が組めない。
・保護者自身や本人も支援体制を作ることを要望してよいのか、どこに、何をどのように要望すればよいのか、保護者の声がないことを理由に支援体制が組まれていないことがあると感じる。保護者の要望の有無に関わらず、支援システムを作る必要がある。
・2019 年の入管法の改正で、特定技能という在留資格が新設されたが、特定技能 1 号を取得して 5 年経った人は特定技能 2 号の申請ができる。特定技能 2 号は家族帯同を求められているので、2024 年以降家族呼び寄せのケースが増えてくるのではないかと思われる。システム作りが急務。

本年度の活動から

○かみとくれんサポート会議「サマースクール」

本年度の、かみとくれん「サマースクール」は７月２９日（土）、Zoom によるオンライン形式で行われました。福祉・教育・歯科・医療・療育の各分野について、授業形式の講座が設置され、参加したい講座を選んで参加できるようにしたところ、１４６名の参加があり充実した研修を行うことができました。「Zoom だったので、休日でも参加しやすかった。」というご意見があった一方で「人と人がつながるためにも、来年は通常の形に戻るといい」というご意見もありました。

そこで、来年度の「サマースクール」については、今のところ次のような形式で実施することを予定しています。

２０２３年度（令和５年度）　かみとくれんサポート会議「サマースクール」　計画

期日：７月３０日（土）　〔予定〕

会場：伊那養護学校　　〔予定〕

形式　・例年のように、各分野による学習会「サマースクール」形式で実施。

・基本的には参集型で行う予定だが、コロナウィルス感染警戒レベルによっては、オンラインと参集型併用またはオンラインのみの計画も視野に入れて実施予定

○「なかよし作品展」（上伊那小中学校特別支援学級・特別支援学校児童生徒作品展）

本年度の、「なかよし作品展」は１０月２７日（木）～１１月１日（火）に実施しました。今年は「いなっせ２階ギャラリー」に戻り再開されました。上伊那郡内の小中学校、特別支援学校のうち、○○校（出品児童生徒数６２４名）からの出品があり、６６６名の来場者を迎え、盛大に開催されました。地域の方々に、子どもたちの作品を見て頂くことで、特別支援教育への理解を深めて頂くとともに、子どもたち同士が互いの作品を鑑賞し合い、次からの意欲につなげるという点において、すっかり定着した作品展となっています。

来年度は、「いなっせ２階ギャラリー」を会場として、１０月１９日（木）～１０月２４日（火）に実施する予定です。

○「愛着障がいと発達障がいの理解と支援」　和歌山大学　米沢好史教授

令和 5 年 1 月 28 日にいなっせ７階ホールとオンライン配信を行い、上伊那教育会特別支援教育研究会主催で講演会が行われました。保育園から高校まで幅広い年代の子どもと携わる方々、それぞれから多くの反響をいただきました。

愛着の形成は保護者と本人だけに限られたことではなく、学校では、教師が子ども達の「基地」となりうることを教わり、子どもそれぞれの「探索行動の港」になっていけるとよいなということを感じられました。また、表面的には同じく見える困った行動でも、原因の違い（愛着障がいと発達障がい）に応じて、求められる対応が異なることも得心がいきました。

子どもに携わる方全てに聞いていただきたい内容です。来年度もこのような学習会で、「愛着」について多くの方と考え、語り合える機会が来るとよいですね。